

断腸亭日乗

—— 高齢者文学人生論

永井荷風 (1879-1959)

『断腸亭日乗』 (1917-59) 「岩波文庫」

『墨東綺譚』 (1937) 「朝日新聞」

監督：新藤兼人 (1989年) 脚本：新藤兼人

出演：永井荷風 津川雅彦 音楽：林光
お雪 墨田ユキ 撮影：三宅義行

四月廿九日、祭日、陰。

永井荷風が陋巷に窮死して、文士の本分を全うしたのは昭和三十五年四月三十日である。推定死亡時刻は午前三時。死因は胃潰瘍に伴う吐血による心臓麻痺。近所に住むお手伝いさんの福田トヨによって発見されたのは午前八時過ぎだ。

大正六年九月十六日から死の前日まで書き続けられた日記『断腸亭日乗』は、「四月廿九日、祭日、陰」で完結した。

文豪の日記にしてはあっさりしすぎている。せめて辞世の句を詠んでがほしかったと思うが、死を翌朝にひかえた衰えきった体で、一行でも書き残したのはさすがだともいえる。

福田トヨは近所に住む七十五歳の女性で、毎日部屋の掃除をしにやってくるようになっていた。日記によれば、福田トヨの名前はなく、小林という人物が荷風の陋屋を何度も訪れている。前日の記述は、「四月廿八日、晴、小林来る。」

この小林は岩波書店支配人の小林勇かもしれないと、最初、私は思った。彼は幸田露伴の臨終を看取っている。同じ文化勲章授章者永井荷風の死の前々日に訪れてもおかしくない。

実は京成菅野駅付近で不動産周旋業を営む小林修だと後でわかった。荷風の陋屋を世話したのも小林修で、「今の世にも親切かくの如き人あるは意外といふべし」と昭和二十三年十二月十三日の記述にある。



断腸亭日乗

—— 高齢者文学人生論

したがって、荷風は自ら孤独を選んだが、孤立してはいなかった。自宅で突然、死んでも、福田トヨか小林修によつて発見されるようになっていたから、孤独死とはいえ、孤立死ではない。

体調に異変が生じたのが約二か月前だったことは三月一日の記述からわかる。「三月一日。日曜日。雨。正午浅草。病魔歩行殆（ほとんど）困難となる。驚いて自動車を雇ひ乗りて家に帰る」。それまでは毎日のように浅草に通っていたが、この日が最後になる。もう生きていても仕方がないと、医者診察も受けなかった。延命措置をほどこせば、三年位は寿命が延びたかもしれない。

三月一日以後は浅草に足を向けることはなく、食事はもっぱら近所の大黒屋でトンカツ定食を食べた。それも四月十九日までである。それから死ぬまで十日間は何を食べていたのか、何も食べなかったのか。日記からはわからない。

ところで、辞世の句は？ 『断腸亭日乗』で探すと、いちばん最後は昭和二十四年三月廿七日の

停電の夜はふけ易し虫の声

窓にほす襦袢なまめく日永かな

という二句だが、むしろ昭和二十一年五月十日の二句のほうが辞世の句らしい、

戦ひに国傾けて牡丹かな

ほろびゆく国の日永や藤の花